

「見よ、わたしは新しいことをする。今、もうそれが起ころうとしている。」イザヤ43：19
 いつの時代も、神様は一人の人を通して神様の業を進められます。この時代もそうでした。
 神様は、イスラエルをエジプトから救い出すために、その指導者としてモーセを選ばれました。そして、神様はモーセに語られました。
 「今、行け。わたしの民・・・をエジプトから連れ出せ。」3：10節

モーセは神様から確かに召されました。しかし彼は不安でした。自分はそんな器ではない
 と思いました。自分が神によって召されたなんてきっと誰も信じてくれないと思いました。
 そんなモーセを主は励まされました。
 「神は仰せられた。『わたしがあなたとともにいる。これが、あなたのためのしるしである。
 このわたしがあなたを遣わすのだ。』」3：12節「私がいるから大丈夫だよ」と語られました。

——— 神様の忍耐 ———

しかし、神様がどんなに励ましても、「口が重い」と言ってなお退こうとするモーセ。
 神様が共におられることを示す杖を与えてもなお「ほかの人を遣わして下さい」と言って
 神様の召しを断り続けるモーセ。ついに、神様の怒りが燃え上がりました（4：14）。それでも
 神様は、その怒りを抑えて、彼を滅ぼすことはしませんでした。
 モーセに「口を与えられた」と語られた神様は、モーセの口の代わりに雄弁な兄アロンを
 与えられました。これ程の神様の忍耐、励まし、ご配慮の中で、ついにやっとモーセはその
 口よりも重い腰を上げることができました。

——— ひたすらただ神を信じて ———

モーセは今、神様から与えられた、たった一本の杖を持って信仰によって立ち上がりました。
 神様だけをただひたすら信じ信頼して……。そして、そこに自分の、そして将来のす
 べてをかけました。それにしても、神様はモーセが、多くの欠陥があるにもかかわらず、す
 べてを承知の上で、なおも彼に期待し、彼を召されたのです。私たちも同じですね。そして
 今、モーセの顔は、しっかりとエジプトに向けられました。
 今、モーセは、神様の使命の中に歩み始めました。
 こうして献身の道の第一歩を踏み出したのです。
 私は、いよいよ十字架を前にした、あのイエス様の姿を思い出しました。
 「さて、天に上げられる日が近づいて来たころのことであつた。イエスは御顔をエルサレム
 に向け、毅然として進んで行かれた。」ルカ9：51節

——— ミディアン之地にて ———

(18～20 節) 神様からの召しを受けた後、早速モーセは、ミディアン之地に帰ります。そして、エジプトに行く準備をします。そのためには、まず初めに、しゅうとイテロの承認を得なければなりません。モーセはイテロに語ります。「どうか私をエジプトにいる同胞のもとに帰らせ、彼らがまだ生きながらえているかどうか、見させてください。」

でも、この言い方はちょっと違うような感じがします。モーセは、神様の召しに従って、我が同胞を救うためにエジプトに向かおうとしているはずでした。しかしここでは、イテロに自分の召しの事をきちんと伝えてはいません。でも、これはモーセが悪意をもって嘘をついているという事ではないと思います。多分きちんと伝えてもイテロは理解できなかったのではないかと想像します。これは主に従うことがまだわかっていない人に対して、余計な誤解を与えないための配慮でした。イテロはモーセに言いました。「安心していきなさい。」

(18 節) きっと、エジプトで昔起こしたモーセの若気の至りの出来事をイテロも知っていたからでしょう。

(19 節) 続けて神様も、すぐに語られました。「さあ、エジプトに帰れ。あなたのいのちを取ろうとしていた者は、みな死んだ。」これは、主がモーセの心の中の不安をよくご存じで、彼を励ましておられるおことばです。主はいつも人の心を見えています。そして 20 節です。

(20 節) 「そこでモーセは妻や息子たちを連れ、彼らをろばに乗せて、エジプトの地へ帰って行った。モーセは神の杖を手を取った。」

そして、主はモーセに語られました。ここで主はエジプトに着いてから、モーセがなさなければならないことを順を追って教えます。(21～23 節、読む)

さて、ここからモーセに対する、神様のお取り扱いが厳しくなります。

——— 神に殺されかけたモーセ ———

(24～26 節) 4：24 節「さて、途中、一夜を明かす場所でのことだった。主はモーセに会い、彼を殺そうとされた。」

今、神様がモーセを殺そうとしています。何故でしょうか？ 確かにモーセは神様から召されたのにその召しを何度も拒みました。「イスラエルの民は、私の声に耳を傾けないでしょう」「私はことばの人ではありません」「他の人を遣わして下さい」等々…。言いました。

でも主はそんなモーセに約束しました。「わたしはあなたと共にいる」と。

これでやっとモーセは召しを受け入れて、今エジプトに旅立とうとしています。

その直後でした。なんと、神様はモーセを殺そうとするのです。何故でしょうか？

——— 割礼について ———

実は、モーセは 40 歳まではエジプトの宮中で育ち、それから 80 歳まではミディアンの地に住んでいました。生きることに夢中だったのです。ですからわが子に対して、割礼を行うことを忘れてしまいました。割礼とはイスラエル人を、他の異邦人と区別するため、とて

も重要な儀式でした。

創世記 17：10、14 節「次のことが、わたしとあなたとの間で、またあなたの後の子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あなたがたの中の男子はみな、割礼を受けなさい。・・・無割礼の男、そのような者は、自分の民から断ち切られなければならない。わたしの契約を破ったからである。」

割礼とは、イスラエルの民が、結婚生活に入ってから、夫婦生活が速やかに進み、子孫が繁栄する様に、男子の性器に傷をつけることでした。このような重要な契約があったにもかかわらず、イスラエルの指導者として立つべき、モーセ自らがそれを怠っていたということは、大きな過ちでした。きっと彼は「いつかそのうちに・・・」という軽い気持ちでいたのかも知れません。でも自分の家族をまとめられない者に、イスラエル全体を指導することは難しいのです。

しかしこの時、彼の賢い妻が、機転をきかせて、夫のモーセを救いました。妻チツボラは今までは子供に割礼を行うことにあるいは反対していたのかも知れません。実は、男子の性器に傷をつけるという様な習慣はミディアンの地にはありませんでした。しかし、彼女はここに来て事の重大さを悟り、素早く行動をしました。

——— モーセ、兄アロンと会う ———

神様のみことばに従うことに勝利したのちに、やがて、モーセとアロンとは、神様の導きによって、神の山ホレブで出会いました。これは彼らにとって大きな喜び、励ましとなりました。モーセがすべてを捨てて一本の杖を頼りにして主に従った時、このように神様は素晴らしい同労者を与えて下さったのです。(27～31 節、読む)

二人は共に、神の子であるイスラエル民族の為、救いの為に立ち上がろうと誓い合いました。二人はエジプトに帰り早速、長老たちを集めて、神様のご計画を皆に伝えました。

——— 民は信じた ———

この二人の姿を見て、アロンが語る神の言葉を聞いて、モーセの行った奇跡を目の当たりにして、やがて、「民は信じた。」のでした。神様がモーセをイスラエルの指導者にされたことを信じ、認めたのでした。31 節「民は信じた。彼らは、主がイスラエルの子らを顧み、その苦しみをご覧になったことを聞き、ひざまずいて礼拝した。」

モーセが神様に従った時に、一本の杖を頼りに従った時に、神様はこの後、すべてのことを最善に導いて下さいました。今、神様と、モーセとアロンと、長老たちと、イスラエルの民とが一つになったのです。こうした出エジプトの戦いの幕は切って落とされました。

[参考までに]

——— 3 種類の息子 ———

ここで、3 種類の息子のことが登場します。今日の箇所には、三種類の息子の事が書かれています。

・その 1、神の子としてのイスラエルです。

神は、ユダヤの民とご自身の関係を非常に重大なことと見ておられます。イスラエルの民は神様の息子なのです。

22 節「・・・イスラエルはわたしの子、わたしの長子である・・・」

・その 2、ファラオの息子です。

ファラオの息子は、ファラオが神の息子であるイスラエルを、神を礼拝しないために解放しなかった罰として、やがて死ぬことになります。

23 節「・・・わたしはあなたの子、あなたの長子を殺す。」

・その 3、モーセの息子です。

24～26 節「さて、途中、一夜を明かす場所でのことだった。主はモーセに会い、彼を殺そうとされた。そのとき、ツイポラは火打石を取って、自分の息子の包皮を切り取り、モーセの両足に付けて言った。『まことに、あなたは私には血の花婿です。』すると、主はモーセを放された。彼女はそのとき、割礼のゆえに『血の花婿』と言ったのである。」

モーセが神の民を約束の地に導くために、モーセは律法に従ってわが息子に割礼を施しました。イエス様もわが民を御国に導くために、律法に従い、自らが洗礼を受けられました。